

『リア王』におけるリアの盲目の死が暗示する事
死によるモラル回復の不可能性

飯島 昭典

はじめに

「娘十八、番茶も出花」とは年頃になれば、女性はどことなく艶めいて美しくなる事を意味し、自分の娘を謙遜して紹介するときなどに使う表現である。父親にとって娘の存在は、大きな関心事であり、息子にかけるとは違った、守りながら大切に、まさに秘蔵としての存在ではないだろうか。父親と娘の問題を扱ったウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『リア王』(*King Lear*, 1606)¹は、老いたる父とその父に対しての娘たちの扱ひ方を問題にした、現代的テーマを含んだ作品である。登場人物たちの意識が作品解釈に重要な要素となっているのは、多くの批評家が述べているところである。

この作品は伝統的に悲劇としてのジャンル分けがなされており、悲劇が悲劇たる理由を述べている研究が数多く存在している。しかし、現代の研究動向を考えた時、主人公のリア(Lear)の最後について、悲劇とは違った解釈を行っている批評家がいるのも事実である。スティーブン・グリーンブラット(Stephen Greenblatt)は、王の死と娘コーディア(Cordelia)の死という惨劇を、膿を出し切った悪魔祓いの状態として、「エキソシストは害ある精神を支配し、個人と共に共同体全体に精神的安定を回復する事が出来た」(“ exorcists could master harmful spirits and restore psychic equilibrium to whole communities as well as to individuals ”)(92)として、悲しみの中にあるプラスの要素を結末に読み込んでいる。

アレクサンダー・レガット(Alexander Leggatt)は「肯定的な読み方は、結末においてリアは教化され、あるいは名誉を回復しさえする、という見方である」(“ Affirmative readings have depended on the view that Lear can be seen as educated, even redeemed, by the end ”)(191)と述べており、衝撃と恐怖で死んでいったという通常の読み方とは違った読みを提示している。トマス・P・ロッ

シュ(Thomas P. Roche)は、同様にリアの最後について「悲劇の主人公は、自分の苦しみを清算するような一種の知識を獲得し、自分が死ぬ事によって弱体化させる世界に対して行う、自身の要求と折り合いをつけるのだ」(“ a tragic hero attains a kind of knowledge that redeems him, his suffering, and reconciles his claims to the world he leaves impoverished for his loss ”)(152)と喜劇的要素を悲劇の中に読み込んでいる。

これら3人の批評家のリアの最後についての悲喜劇的解釈は、いまやシェイクスピア研究の古典となったアンドリュー・ブラッドレイ(Andrew Bradley)のリアは人生を回復し、耐え難いほどの喜びにより死ぬ、という解釈を出発点とし、応用させたものと言えるのではないだろうか。しかし、いま一度考えて欲しい。リアは視力を失うという盲目の状態ですら死を迎えるのである。この点を上に挙げた批評家たちは無視していないだろうか。

Lear And my poor fool is hanged. No, no life.
Why should a dog, a horse, a rat have life,
And thou no breath at all? O, thou wilt come no more.
Never, never, never. Pray you, undo
This button. Than you, sir. O, O, O, O! (273-4)

リア 私の可愛そうなあほが絞め殺された。もうだめだ。
犬も馬もネズミも命があるのに、
なぜお前は息をしない。お前は二度と戻ってこない。
二度と、二度と、二度と。お願いだ、はずして欲しいのだ、
このボタンを。ありがとう。ああ、何てことだ。

コーディリアのボタンを目が見えず、自分で取る事が出来ないリアである。² この台詞の直後にリアは絶命するのだが、目の見えないリアは、真実の見えないリアと解釈する根拠になりうるのではないだろうか。私は目の見えないリアの死にプラスの結末を読み込む悲喜劇的解釈を否定する。王の絶命に浄化作用は存在せず、非業の死である、という伝統的解釈に新たな意味を与えようと思う。リアの盲目の状態での死には、どんな意味が隠されているのだろうか。この問いに答えるために、第1節ではリアの3人の娘の弱さと強さを説明し、第2節では矛盾に満ちたリアの性格を説明する。そして結論に結び付けたいと思う。

1. 3人の娘の弱さと強さ

『リア王』の劇の発端は、長女ゴネリル(Gonoril)、次女リーガン(Regan)、そして末娘コーディリアにブリテンの老王リアが王国を分割しようとし、どれほど父を愛しているかを尋ねる事である。率直さゆえに傷つき、3姉妹の中で唯一好感が持てる人物と考えられるのはコーディリアである。それぞれ夫を持ちながらもエドモンド(Edmund)に情欲を抱き、夫に代わる事を望むゴネリルとリーガンは、通常好感の持てる人物ではない。そして実の父リアに対しての扱いもコーディリアによる扱いと比べてみたならば、冷遇と考えられるものであり、この点からも彼女たちは悪女としての名を持つのに十分な存在と言えるであろう。

そのような彼女たちにキャスリーン・マックルスキー(Kathleen McLuskie)は、以下のような解釈を述べている。「ゴネリルとリーガンの父親の扱いは、単純に規則という現存する類型を反転させるだけであり、残酷でわがままとは単純に考えられず、人間の本質を根本的に破るものと考えられるのである」(“Goneril's and Regan's treatment of their father merely reverses existing patterns of rule and is seen not simply as cruel and selfish but as a fundamental violation

of human nature ”)(139)。「人間の本质」とはこの場合、親子として子が老いた親の面倒を見るという基本的な考え方を指すのではないだろうか。子としてのゴネリルとリーガンは親であるリアをないがしろにしているのである。しかし、彼女たちに親であるリアについて当然と思える意識は全く欠如しているのだろうか。以下の場面をここで引用してみたいと思う。

Regan 'Tis the infirmity of his age; yet he hath ever but slenderly known himself.

Gonoril The best and soundest of his time hath been but rash; then must we look to receive from his age not alone the imperfection of long-engrafted condition, but therewithal unruly waywardness that infirm and choleric years bring with them.

Regan Such unconstant starts are we like to have from him as this of Kent's banishment. (115)

リーガン 年のせいの頭の弱さなのよ。もっとも自分の事となるとわけのわからない人だったけれど。

ゴネリル 一番元気でしっかりしている時でも無分別だったのに年のせいで私達はどうなるのかしら。長年の凝り固まった不完全な性格だけでなく、ひどい気まぐれと年のせいで、手を焼かされるかもしれないわ。

リーガン 私たちもケントが追放されたみたいに気まぐれの発作に襲われるかもしれない。

ゴネリルとリーガンは加齢による父の衰えを実感しており、それに伴う彼女

たちの不利益を恐れているのである。父親の衰えの実感は親と子の関係の中で、当然と思える感情ではないだろうか。リアに対しての冷たい対応はあるものの、老いの実感と精神の衰えは認識しており、父親の若い時の精神の鋭さと正当性は、現在全く考慮に入れていないのである。加齢と衰えに伴う自分たちの不利益を心配して父親に対して取った冷たい扱いというのは、ある意味理解ができないものではない。子が親に対して当然考える、老いと衰えの認識をゴネリルとリーガンは持っているのである。ゴネリルとリーガンの取った行動は、親の老いと衰えから生じる自分たちの弱い立場を守るための行動とも考えられ、悪女と考えられる彼女たちに、一種の正当性を与えるものなのではないだろうか。

サブプロットに見出せる父親グロスター(Gloucester)に対するエドマンズの扱い方も、私生児としての弱い立場をはねのけようとする、自分を守るための行動と考えられるのである。プロットとサブプロットの呼応関係は、同じように悪人と考えられるリアの娘ゴネリルとリーガン、そしてグロスターの子エドマンズの間、弱さから自分を守るために取る行動という観点で、見出す事が出来るのである。

それでは正直さゆえに傷つき、最も同情を誘う登場人物と考えられるコーディリアについてはどうだろうか。末娘という最も若い立場が示すように、最も弱い立場にある最も精神的に弱い人間なのだろうか。傷つく登場人物として、そのような特徴を読者は彼女に与えがちなのは、無理な事ではないように思える。戯曲とは読むことが半分の理解であり、観ることがもう半分の理解である、というのは度々言われる事である。1982年のBBC製作のテレビドラマは、ジョナサン・ミラー(Jonathan Miller)監督の下、まさにか弱いコーディリアを作り上げている。ミラーによるコーディリアの演出をH・R・クーセン(H. R. Coursen)は「リアはコーディリアに対して近親相姦的な願望を抱いており、自分が彼女の優しい温床に横になる望みを、覆い隠している」(“Lear harbors an incestuous

desire for Cordelia, disguised in his wish to set his rest in her kind nursery”)(224)と述べており、ミラーは「リアが強いる、ほとんど文字通り、売春的と言える行為を拒むコーディリア」(“Cordelia who refuses the almost literal prostitution Lear would force upon her”)(224)という傷つきやすい弱い女性との解釈を行っているのである。

しかし言葉の率直さを持つコーディリアは本当に弱く傷つきやすい存在とだけ解釈してよいのだろうか。言葉の率直さが必ずしも父親との関係で望ましい態度である、とだけは言えないのではないだろうか、というのが私が提示する疑問である。父親との仲たがいの原因となる作品冒頭部分のコーディリアの発言を、ここで引用してみる事にする。

Cordelia Good my lord,
 You have begot me, bred me, loved me.
 I return those duties back as are right fit
 Obey you, love you, and most honour you.
 Why have my sisters has husbands if they say
 They love you all? Haply when I shall wed
 Thad lord whose hand must take my plight shall carry
 Half my love with him, half my care and duty.
 Sure, I shall never marry like my sisters,
 To love my father all. (104-5)

コーディリア お父様、
 あなたは私を生み、育て、愛してくれました。
 そのご恩に報いるのが当然と思い、

お父様に従い、愛し、そして心から尊敬しています。
でもお姉さんたちみたいに夫がいながら、こうは言えません。
愛の全てをお父様に捧げるとは。私がもし結婚したら、
私の誓いを受けるに違いない夫が、
愛の半分を手にし、そして心づかいと恩も半分手にするのです。
私はお姉さんたちのように、結婚してなお、
愛の全てをお父様には捧げられないのです。

ここでコーディリアは父親への愛情と夫への愛情を同じものと考え、混同している。夫がいれば愛情は半分しか父親には捧げられない、と述べているのである。しかし、親子の愛情と夫との愛情は、本来別のものであり、両立させる事が可能な、性格を異にするもののはずである。この事はコーディリアによる誤った考えである、と判断する事が出来るのである。³そして自分に対してのリアの愛情を感じながらも、上の引用で父親を怒らせる事になるコーディリアに全く非がない、というには疑問が残るのである。言葉の率直さは、リアの父親としての愛情の見せ方を否定しており、その意味で父性を無視しているのである。老いた父親を否定するコーディリアには、当然の事ながら、父親の加齢による不完全さを認める意識は欠如している。悪女ながらも父親に対して老いを認めているゴネリルとリーガンとは違い、老いた父親の愛情を自分の夫との愛情と同じレベルで考える事によって、コーディリアは父親の老いを認めていないのである。親子関係を考える上で、親の老いを認めていないコーディリアにも非難すべき点は見出せるのである。そして率直に言葉を告げるコーディリアに精神的な強さを見出すのも無理な推論ではないはずである。この点でも弱さを特徴とするコーディリアについての解釈には、疑問が生じるのである。

フランスの軍隊を率いてブリテンに上陸するコーディリアは、結果的にブリ

テン軍に敗北し、リアは投獄の憂き目にあうのである。コーディリア自身が絞首刑にされた事が、リアの絶望死の直接の原因と考えるならば、コーディリアは自分でリアの破滅に貢献してしまっている、と考える事も出来るのである。コーディリアの死によるリアの死は、彼女の率直さという強さと、コーディリアによる父親の老いを認めない性格が生んだ悲劇なのである。悪女と考えられているゴネリルとリーガンに自己防衛的な正当性があり、通常非のない登場人物と考えられているコーディリアにも非があるのが、この節で明らかになったのではないだろうか。ゴネリルとリーガン、そしてコーディリアとの間の、弱さと強さ、老いの認識と非認識の対比である。

2 . 矛盾に満ちたリアの性格

この作品のタイトルは『リア王』であり、リアの性格を考慮に入れる事は論の展開上絶対に必要な事と思われる。末娘コーディリアとの仲たがいにより、物語が展開するわけだが、リアとコーディリアには共通する資質も多い。互いに言葉によって己の行動と運命が決定され、その意味でこの作品は、古くから繰り返される、言葉の限界とその真意に取り組んでいる作品とも言えるし、彼らは言葉によって翻弄される存在である。リアは自分が発する言葉の意味を十分に伝える事が出来ないのみならず、自分が望む方向とは逆に己を不利な状態に陥れてしまうのである。ゴネリルの冷遇に対して、皮肉をまじえて非難するリアは次のような言葉を発している。

Lear Doth any here know me? Why, this is not Lear.

Doth Lear walk thus, speak thus? Where are his eyes?

Either his notion weakens, or his discernings

Are lethargied. Sleeping or waking, ha?

Sure, 'tis not so.

Who is it that can tell me who I am?[...] (135-6)

リア 私を知っているものはいるか。私はリアではない。

リアがこのように歩くか。このように語るか。リアの目はどこだ。

リアの頭は鈍ったのか。あるいは分別は、

眠ったのか。眠ったのか起きているのか。

何、それは違うぞ。

誰でもいい、教えるんだ。私は誰だ。(……)

リアがここで行っているのは、皮肉を交えたゴネリルに対しての非難である。リアという人間に対して相応しくない扱いを自分は受けているから、私はリアではないのだろう、という主旨で非難をしているのである。しかし、ゴネリルはこの皮肉を一蹴し、「近頃の悪ふざけ」(“other your new pranks”)(136)と同じようなものであり、逆に「あなたは年をとって尊敬されているのだから、分別を持ってください」(“As you are old and reverend, should be wise”)(136)と非難し返されるのである。リアの行った皮肉という非難は、功をなさないのである。コーディリアがリアに行った怒りを引き起こす発言と似ているのではないだろうか。真意が伝わらず、逆に不利な立場に己を置いてしまうのである。

コーディリアとリアの共通点はこれだけにとどまらない。コーディリアがリアの老いを認めていないように、リア自身も自分の老いと衰えを認めていないのである。リアは現職の王から隠居を決めて、娘たちに領土を分割しようと思っただけである。しかし、実際のリアは、若い時と変わらず同じ権力を振りかざしているのである。⁴「私は知りたい。私はこのような称号の名のもとに / つまり、

王としての威厳、知識、理性で / 私には娘がいると考えるのは間違いかと」(“ I would learn that, for by the marks / Of sovereignty, knowledge, and reason / I should be false persuaded I had daughters ”)(136)。この発言は自分の権力を誇示するものであり、隠居を決めた王の発言ではないのではないだろうか。些細な事で娘たちをしかりつけ、狩りに興じるリアに衰えを意識した老いの感情は見られない(124)。年を重ねただけであり、若い人間の感情を持っているのである。権力にしがみつき、それを振るい続けるリアに本当の意味で、威厳と権力はあるのだろうか。重ねた年が可能にする理性と分別を有していないリアは、自身の老いを認めない、年をとった子どもというレッテルを貼られても仕方がないように思えるのである。

19世紀のドイツでは『リア王』を「泣き虫のリア」(“ weeping Lear ”)(203)と解釈し、「子供の王であり、救いようのない子供」(“ the child in the king, the helpless child ”)(203)として上演しているが(Rosenberg)、この上演史をテキストの解釈と照らし合わせたなら、自身の老いを認めないリアは、まさに大きくなりすぎた子供という考えを導き出すのに、うってつけの材料と言えるのではないだろうか。コーディリアがリアに対して老いを認めていないように、リア自身も老いを認めていないのである。

コーディリアとのはっきりした老いを認めない、という共通点が示すのは父親と末娘の深い関連性である。そして長女ゴネリルと次女リーガンの冷遇に対して怒り、子供のような発言をするリアが表すのは、娘に対しての依存という関連性である。ゴネリルからリーガン、そして最後に死の瞬間まで頼りにするコーディリアという娘3人に対してのリアの依存状態は、プロットの進行からも明らかではないだろうか。そして彼の他者への依存の強さを表すのは、自分の供まわりを100人も置いていた事からも明らかかなはずである。国王の身分として、供まわりを持つのは、それほど不思議な事ではないのかもしれない。しかし、1

00人という数の多さ、そして娘に50人、そして25人に減らされた時に示すリアの反応は、明らかに狼狽である。「私は全てを与えたのだ」(“I gave you all”)(174)というリアの短い、一見すると脈絡のない答えは、全てを与えたにもかかわらず、多くの供まわりを要求しているリアとは矛盾しており、全てを与えたにもかかわらず、まだ自分から取り上げるのか、という無意識の発言である。そして何も持っていないという意識で、多くの供まわりを要求するリアは、無意識に他者への依存をおこなっているのである。国王という身分からでる他者への命令という依頼だけではなく、リア自身の性格に起因する依存性の強さが明らかではないだろうか。リアが述べる自分と娘ゴネリルの関係を表す次の箇所をここで引用してみたいと思う。

Lear But yet thou art my flesh, my blood, my daughter
Or rather a disease that lies within my flesh,
Which I must needs call mine. Thou art a boil,
A plague-sore, an embossèd carbuncle
In my corrupted blood. But I'll not chide thee. (173)

リア しかしお前は、私の肉、血、そして娘。
というより私の肉の中にある病。
それでも私自身のものと呼ばねばならないもの。お前は腫れ物。
ひりひりする厄介物、吹き出物、
そして私の腐った血の中に存在している。だがお前を非難はしない。

リアは娘を、腫れ物や吹き出物という害あるものと断定しながらも、自分の体の一部であり、自分も汚れたものである、と認めている。娘をけなしながらも、

自分をけなす、という矛盾を行っており、一心同体を強く読者に印象付けるのである。娘なしでは生きられないリアの依存状態は、明らかなのではないだろうか。孤独に耐える事は出来ないのである。

嵐の中で一人気が狂い歩き続けるリアは、一人の孤独に当然の事ながら耐えている状態ではない。⁵そして娘たちに冷たくされ、人との関係においても孤独を感じているリアは、次々と依存先を変えている点で、孤独に耐えている状態ではない。一人においても、人間関係においても、リアは孤独に耐えていないのである。F・D・ホエニジャー(F. D. Hoeniger)は、結末でのリアについて、「コーディリアを前にして、後に狂気から目覚めた時、それは自分の経験がこの出会いを生んだのだが、本当に必要なものは、権力ではなく愛である事をやっと知るのだ」(“ When he is later awakened from his madness in Cordelia’s presence, his experience has prepared him for this encounter, so that he knows at last that his real need is for love, not for power ”)(78)と述べているが、愛という感情であれ、人との結びつきであり、孤独とは相容れないものなのである。国王のあるべき姿として、一人の孤独にも人間関係における孤独にも、マイナスの意味しか見出せないリアは、果たして望ましい姿をした国王と言えるのだろうか。愛の存在を知る事は重要である事に変わりはないが、娘について考える自分の気持ちという個人感情の新たな発見は、何も国王でなくても出来る事であり、数々の悲劇を自らの行動によって生み出す国王リアが知る事としては、あまりにも瑣末な事なのである。末娘コーディリアに似た性格を持ち、強い関連性を示すリアと娘なしでは生きられないリアが示唆するのは、彼の娘への依存性である。また、老いてはいるが老いを認めない、娘へ権力を委譲しながらも、権力を振り回し、頼りきっているリアは、彼の矛盾した行動と性格を表している。依存性の強い性格を持ちながらも、国王としての孤独、あるいは孤高の働きを期待されているリアは、矛盾に満ちた主人公であると言えるのではないだろうか。

おわりに

『リア王』におけるリアとコーディリアには、老いを認めないという類似点があり、コーディリアの欠陥はそのままりアの破滅にも関係している、という事を第1節では説明した。コーディリアの死がリアの死につながっている事を考えるならば、コーディリアの作品中での役割は、最も重要なものである事がわかるのではないだろうか。そして第2節では、娘たちへの依存から抜けきれないリアの状態を説明した。一人の孤独にも人間関係の孤独にも、否定的な意味しか見出せないリアは、孤高の働きを期待される国王としては、不十分である事を説明した。⁶ 作品終盤でコーディリアと和解したリアは互いに似た境遇を思い、次のような提案を彼女に行っている。

Lear No, no. Come, let's away to prison.
We two alone will sing like birds i'th' cage.
When thou dost ask me blessing, I'll kneel down
And ask of thee forgiveness; so we'll live,
And pray, and sing, and tell old tales, and laugh
At gilded butterflies, and hear poor rogues
Talk of court news, and we'll talk with them too [...] (257)

リア いやいや、さあ、牢獄へ行こう。
二人きりで籠の鳥のように歌おう。
お前が祝福を求めれば、私はひざまづき、
お前に許しを乞う。こんな風に生きていくんだ。
お祈りをし、歌い、昔話をし、笑おうじゃないか。

あのけばけばしい蝶みたいな連中を。卑しいものたちから、
宮廷の噂を聞いて、そして仲間に入ろう。(……)

リアがコーディリアとの和解で気付いたのは、二人きりの籠の中にいるように、公共の状態とは正反対の状態である。公共の事を考えていないリアは、この発言でも明らかなように、国王の職務を完全に見失っているのである。公共の善を考えない国王は当然の事ながら、国王のあるべき姿は発見する事が出来ない。娘と二人きりでの生活を夢見て、その夢すら娘の死によって破られ、衝撃のあまり死んでいくリアである。⁷ 公共の善という国王の真理を最後まで見出せないリアは、盲目の状態が示唆しているものなのである。リアの盲目の状態での死は、最後までこの公共の善という真理を見出せないリアの状態を表しているのである。

ジョン・リーベタンツ(John Reibetanz)は、サブプロットの働きについて、「二重のプロットというのは、状況を並列させる手段となる。劇的に象徴を並列させ、両者を比較させるのだ」(“ the double plot became a means of juxtaposing situations and, as with dramatically juxtaposed emblems, inviting comparison between them ”)(171)と述べているが『リア王』におけるサブプロット、グロスターの子であるエドガー(Edgar)とエドマンズの確執は、父グロスターの死により、エドマンズが改心、父の最期の様子を聞いて、「その話は私の胸を打ちました。 / これで私もまともな人間にもどれるかもしれません」(“ This speech of yours hath moved me, / And shall perchance do good ”)(267)という言葉を引き出す事になる。サブプロットには、明らかにモラルの回復が見られるのである。しかしリアの死には、最後まで真理を見出す事ができない、という暗黒の状態なのである。盲目の死には、モラルの回復は見られないのである。サブプロットの改心という光明とは逆に、暗黒の状態での主プロットの結末は、

対比が明らかであり、光と影の真逆の結末なのである。真逆の結末は、劇的な効果を挙げる上でも、有効であろう。この意味でも、リアの最後の死はモラルの回復がない、つまり破滅の死であるとするのが、当然なのである。

この論文の問いはリアが盲目で絶命する事には、どんな意味が隠されているのかを明らかにする事であり、結末にモラルの回復という浄化作用があるかないか、を明らかにする事であった。これまでの説明で答えは明らかになったはずである。自身の矛盾に満ちた性格で秩序を乱しながら公共の善という国王のあるべき真理を見出せずに盲目で死んでいったリアは、精神的な意味でも盲目の状態での死である。リアの死にはモラルの回復は見出せないのである。それゆえ、この作品は、悲喜劇としてのジャンル分けではなく、浄化作用のない主人公の破滅の死が暗示するように、悲劇そのものの作品なのである。

娘を持つ父親を描いたこの作品は、娘に頼りすぎた父親の悲劇とも考えられる作品である。娘だけではないが、子の成長に気付かず、「子離れ」の出来ない親というのは、親子関係を乱す大きな要因と現代でもなっている。親から子へと世代が移って時代が進むこの世の中で、親子の確執は消える事のないものなのかもしれない。親となる世代にぜひ読んでもらいたい作品と思いつつ、筆者は筆を置く事にする。

註

- 1 . 以下、『リア王』からの引用は、ウィリアム・シェイクスピア *King Lear*、Ed. Stanley Wells、The Oxford Shakespeare のシリーズの版に拠る。なおこのテキストではゴネリルを(Gonoril)と表記してあるので、そのままそれに従い(Gonoril)と記した。
- 2 . この箇所ボタンは、リア自身のボタンをはずそうとしているとも考えられ、息苦しさや苦しみを軽減させようとする行為とも解釈できる。しかし、筆者は、コーディリアの形見としてボタンを要求していると考えた。
- 3 . 親子の愛と夫への愛の混同は、先に述べたクーセンのリアとコーディリアの近親相姦的關係の論と絡ませる事も可能かもしれない。
- 4 . 道化が述べる帽子とは、リアの権力であり、王冠の比喩である。名ばかりの国王の肩書きが、容易に着脱の出来る帽子の手軽さと同様に、簡単に剥奪されることが表現されている。
- 5 . 嵐は当然の事ながら、リアの心象風景を表している。激しい心の不安や怒り、恐怖は稲妻や雨、風の激しさによって象徴的に表現されている。
- 6 . 孤独に肯定的な意味を持たせるならば、現在の個人主義にもつながっていくと思う。孤独に良い意味を見出せないリアは、寂しさに勝てず、人への依存をさらに望む。
- 7 . この衝撃の死を「憤死」と説明している『リア王』の解説書が、明治以来の日本で度々見られる。絶望の死というより、あまりにも激しい怒りのために、絶命する様子は、ある意味面白い考えであると思われるが、筆者は悲しみの死であり、弱いリアの精神状態の極みを表していると解釈している。

引用・参考文献

- Coursen, H. R. . “ Lear and Cordelia. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 216-26. Print.
- Greenblatt, Stephen. “ Shakespeare and the Exorcists. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 88-121. Print.
- Hoeniger, F. O. . “ The Artist Exploring the primitive: *King Lear*. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 75-87. Print.
- Leggatt, Alexander. “ Madness in *Hamlet*, *King Lear* and Early Modern England. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 123-38. Print.
- . “ Problems and Choices in Producing *King Lear*. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 183-96. Print.
- McLuskie, Kathleen. “ The Patriarchal Bard: Feminist Criticism and *King Lear*. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 139-48. Print.
- Potter, Lois. “ Macready, the Two-Text Theory, and the RSC’s 1993 *King Lear*. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 207-15. Print.
- Reibetanz, John. “ The Gloucester Plot and Its Function. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall

&Co., 1996, 170-82. Print.

Roche, Thomas P. . “ “ Nothing Almost Sees Miracles ”: Tragic Knowledge in *King Lear*.” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 149-69. Print.

Rosenberg, Marvin. “ Lear Enter. ” *Critical Essays on Shakespeare’s King Lear*. Ed. Jay L. Halio. New York: G. K. Hall &Co., 1996, 197-206. Print.

Shakespeare, William. *King Lear*. Ed. Stanley Wells, Oxford: Oxford UP, 2000. Print.